



共同通信



2007年3月7日 127号(337号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22
0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email:koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://www.koudou.jp/> 振替 01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 27

『わたしの家族』

末っ子長男姉3人！そして父母の6人家族！が、私、藤原家の家族構成です。そんな家の次女として生まれたのが、私、藤原紘子です。

西宮共同幼稚園に勤めるようになって1年、今回共同通信に登場することになって、何を書こうか～と悩んだ時に出てきたのが家族の事。それで紹介させていただきます。

まずは長女、陽子(30歳くらいか)と聞いていたら、まだ23歳だった♪なんとも自分に自信満々で、とにかく強いのが私の姉です。さらに自分勝手に、こういう人が人生の勝ち組っていうんだろうな～ってよく思います。自分勝手な姉に被った被

害は数えきれません。そんな姉の事はとにかく大っキライでした。

数年前に家をでてからは、たま～に会う程度なので、昔ほどキライではなくなりましたが...

そんな姉とは対称的な次女の私、紘子(21歳)とにかく自分に自信はないし、やる事成すことウマくないし、O型にしては変なところ几帳面で～かなりの心配性、そして人見知り...なのです。多分、私の持つべき『自信』をすべて姉に持っていかれたのではないかと思います。

その次に生まれた三女、智子(18歳、精神年齢10歳)かなりのくせ者で、性格がびっくりするくらいに、

ひん曲がっています。1番ケンカが多かったのが彼女とだと思えます。けれど、お菓子作りがすごく上手で、そこは褒めてやりたいと思いません。でもやっぱり姉、妹とは年齢が近いせいもあるのでしょうか...?よく対立していました。昔は殴り合い、ひっかきあい、髪の毛の引っ張り合い...かなりハードなケンカも繰り広げられていました。

女、女、女...と続いてやっと生まれた待望の長男!豊(15歳、やっぱり精神年齢は8歳くらい。未だに日曜の朝のなんとかレンジャーe.t.を欠かさず見ている)彼はすごく優しく、誰からも好かれる存在なんです。でも彼も私に似てかなりの心配性、そしてプレッシャーにすごく弱い!!大事な日の前日には必ず腹痛に苦しんでいます。私とは年が離れているせいか、弟と私はすごく仲良しでいつも2人でつるんでいます。

そして、一家の大黒柱...であるべき父、敏雄。無口でめったなことでは怒らない父。時々『お前もうすぐ19歳か?』と娘の年齢もわからないくらい家族に対して無頓着な父ですが、実はすごく人の話を聞いていて頼んだことは次の日には必ずとっていいほど叶えてくれています。真面目で、何一つ文句も言わずに家族の為に働いてくれている父のことは、本

当にすごく尊敬しています。

そんな父とは対称的な母、悦子。おしゃべり大好きな天然ボケ母...。そして涙腺が壊れているんじゃないか?ってくらいに涙もろい。母は映画の宣伝を見て、内容を想像しただけで泣いてしまうのです...観てもいないのに。恐ろしい涙腺ですよ。そんな母に似て...私も涙もろいのですが。

干渉せず自由に育ててくれた母にはすごく感謝しています。

高校時代、門限が厳しかった友人は、6時になると必ず『どこにいるの?何してるの?』と彼女の携帯にはメールが入っていました。そしてそのメールに返事を返さないでいると、次は電話。そんな友人を見て、『私があんたやったら絶対グレとるわ...』って言ったのを覚えています。母は私の事をちゃんと信頼してくれているんだろうなあとは感じていました。そんな風に自由に育てられたから...?私自身、なんとか真っ当に生きています。

そんな家族と共に生きてきた21年間。4人姉弟だから...やっぱり我慢することも多かったし、姉として下の2人の面倒を見たり、いろんな大変なこともありました。でも、4人姉弟だから楽しいことがそれ以上にたくさんありました。『4人って大変

やなあ～』なんてよく言われたりもしますが、私はそうは思いません。むしろ一人っ子で『家に帰っても誰もいないねん』っていいながら家のカギを首からぶら下げている友人の方がよっぽど可愛そうだと思います。

母が働き始めた時も、姉弟がいたから、家に帰った時には誰かが待っていてくれました。『ただいま』にはちゃんと家族の『おかえり』があります。どんなことよりも、その『おかえり』が1番心温まるものだと思います。そして今こうして幼稚園で働いているのも、4人姉弟で弟や妹の面倒をみていたから...というのが大きいと思います。

どれだけ殴り合いのケンカをして『大キライや～！』って言い合っても

...やっぱり姉弟、家族の事は大好きで、誰一人として欠けてはいけない、かけがえのない存在なんですよ。

こんなにキャラの濃い藤原家の中に生まれた私でさえも姉弟っていいな、と思うのですから、きっと兄弟、姉妹ってすーっごくいいものなんですよ。

4人姉弟、そして6人家族でよかったと心から思います。

4人姉弟～6人家族バンザイ！！

(藤原紘子)



日本基督教団西宮公会集會案内		
早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮公会集會室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公会禮拜堂
聖日禮拜	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公会禮拜堂
聖書研究祈祷会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
読書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆっくり聖書を讀む会	毎月第3火曜日午前10時から	於：西宮公会集會室

・・・しかしそのいずれからも、日本の固有の文化の本質を、世界の誰にも通じる普遍性の場所から判定するとどうなるか、という敗戦以来の著者の執念が、著者独特の独白調で伝わってくる。著者の中の世界と日本の「距離」への緊張感が、何とも新鮮に目を打つ。
(加藤典洋)

イエスの弟子たちが「・・・不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている」ことが見つかって、“パリサイと律法学者”からとがめられます(マルコ福音書7章1節～)。“洗わない手で、パンを食べた”その振る舞いがただとがめられたのではなく、その時のその社会の約束である「昔の人の言い伝え」を守らなかったことがとがめられているのです。マルコ福音書のイエスは、そうしてとがめられたことを、逆に徹底的に批判します。とがめた人たちのことを「・・・あなたがた偽善者」と決めつけ、イザヤの言葉を引用して批判します。「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』と。“こう書いてある”とされるイザヤの預言は、「この民は口をもってわたしに近づき、くちびるをもってわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、

彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、そらで覚えた人の戒めによるのである。(イザヤ書29章13節)であったりしますから、マルコ福音書のイエスの方がそのことをより厳しく見つめているように読めます。

それで止まらずに、マルコ福音書のイエスは「あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言い伝えに固執している」「あなたがたは、自分達の言い伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ」と、“神のいましめ”と“人間の言い伝え”を峻別しようとしています。“神のいましめ”として挙げられているのが“モーセの戒・父と母とを敬え”です。そして“父と母とを敬え”をめぐる言及されていることは、現代社会にも通じる古代社会の高齢者問題です。即ち、食いぶちを稼げなくなってしまったらしい高齢者に、家族のものたちがたとえば、食べものをけちったりしているらしいことです。「もし人が父または母にむかって、あなたに差し上げるはずのことものは、コルバン、すなわち、供え物ですと言え

ば、それでよいとして、その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている(マルコ福音書7章11,12節)。ありもしないことを、“お話”としてしているのではなく、目の前で行われている、全くもって身勝手な振る舞いが許せない、というのがこの場合の一番言いたいことのように思われます。取るに足らないいましめのことは、ああだこうだと口うるさくこだわられるのに、父と母とを敬うという、人が人である時に守るべき最低限のいましめをのがれる“口実”の為だったら手段を選ばないのが許せないというのが、マルコ福音書のイエスの言いたいことらしいのです。

旧約聖書で“神の戒・モーセの戒”としてまとめられている10の戒の一つが“父と母とを敬え”です。で、“人間の言い伝え”と“神の戒”のどこが違うのか。そもそも、あれこれ、ごたごた“いましめ”なるものがあるてはならないのであって、あり得るとすれば、極々限られたものでなくてはならない、というのがマルコ福音書のイエスの“いましめ”理解です。

“モーセのいましめ”というくらいですから、それが“絶対的”な“大原則”であるかということではなく、人

が人として生きる最低限の約束事なのです。一方、“人間の言い伝え”が強く要求される場所では、それを守る形式主義が人としてのささいな振る舞いを合理化してしまう態度が許せないという具合に。確かにパンは、あたりまえにそこにあるのではなく、神からの恵みであってみれば、その都度手を洗う、清めるなどのことはあるべきことかも知れませんが、だからといって、たまたま手を洗わなかったりしたら、それが全く“不浄”だと断定されることにはなりにくいのです。その日の生活に追われる人たちの、その家族が、手を洗わなかったとして、今日のパンを与えられたことを神の前で喜ぶということ

はあり得ることです。たぶん、イエスの時代にイエスと一緒に生きる人たちの多くは生活には追われながら、そんな人たちの振る舞いが一方的になじられることにがまんができなかったに違いありません。

“宗教”ないし“宗教的態度”は他者を攻撃する手段になり得ることもあれば、生活上の態度を、“宗教”ないし“宗教的態度”として合理化することもあり得ることが、ここでは問われているらしいことです。

(菅澤邦明)

ア コ ー ク ロ ー 通 信 (1 0 7)

お騒がせしていた論文「韓国近現代史における女性の地位の諸相とその変容」は、一部から、膨大な知識の断片を寄せ集めた代物という批難にもめげず、教授からさんざんあきれられながらともかく完成、合格、3月10日修了式を迎えます。牧師の試験もそうでしたが、ひとつは昔「大学」から投げ出された多くの人々の「敵討ち」みたいな思いと、牧師も修士も誰がなったっていいじゃないか、というような思いとが重なるのです。雑文、駄文は山のように書くのですが、「論文」は作法もあり、中身はないのだからせめて体裁だけでも、とぎりぎりまでダメだしされました。表や参考文献の表記の仕方も後藤流ではよろしくないのが本当に最後までかかりました。30年前の卒論時にはなかったパソコンのおかげで助かりました。文献資料も相当あさりしました。それはそれで財産です。

で、3月31日までは「学生証」が有効なので、学割で映画を見まくるのです。あんまりいいのやっていないのですが・・・。

ところで、先日、久しぶりに京都に行ってきました。新しい京都駅びっくりしました。とある会議だったのですが、食いしん坊の後藤は、大阪・鶴橋で韓国料理を食べ、京都では新京極の乙羽の蒸し寿司やイノダの

コーヒーなど楽しみました。実はあるラーメンも食べたのですが結局ダメでした。会議も、初めての出会いもありながら、同窓会的出会いですっかりおじさんやおばさんになったものたちが今後の「地域での運動のあり方」を検討するというもので、ちょっと違うんじゃないか、もっと若い人を呼ぶべきと思いつつ、こんな時でなければ今生ではもう会えないかもしれないので、それはそれでよかったです。

たまに、本土に行くと「本屋」が充実しているのに感心します。西宮も京都も「ジュンク堂」の豊富さにびっくりしてしまいます。いや、今時、アマゾンなんかでいろいろ買えるのですが、おじさん世代はやっぱり本棚に並んだものを手にとってみないと納得できません。いくらか面白そうなものを仕入れました。

近頃の宿泊先にはただで使えるパソコンもあって、メールや論文の修正に役立ちました。そう、パソコンがなければ生きていけません。職場のパソコン、業務上横領になるくらい使い倒しています。

さて、3月。出会いは別れの始まりで、別れはあらたな出会いの始まりです。何も変わらない人もいるでしょうが、大きな変化が待ち受けて

いる人々も大勢いることでしょう。不安と期待でいっぱいでしょう。まあ、たいてい何とかなるのです。むちゃくちゃな時代ですが何とかなるのです。そう、おじさんやおばさんとはともあれ、子供たちがむちゃくちゃ

になってはいけません。みんなで、ちょっとだけでもよくしましょう。

お付き合いいただいて感謝。では、また。

(沖縄・与那原・愛の園 後藤 聡)

いっぱいの春を感じています

暖かい日が続き、過ごしやすい毎日です。コマやけん玉、竹馬など冬の遊びも楽しみながら、暖かい日にはサンダル、半袖で泥んこ遊びを思い切り楽しむ姿もたくさん見られます。散歩に行くと、色々なところで春を見つけています。2月の初めに“つくし”が頭を出しているのを発見しました！その時は2、3本と少なく、とても小さかったのですが、しゃがみ込んで見て「わぁー」みんなで喜びました！そして先日あのつくしはどうなっているのかなぁと話しながら行ってみると～「あった！！・・・あそこにも！！・・・またあった！！」という幹事でたくさんのかつくしがツンツン！！そして つくしはツンツンでるもんだ～ みんながつくしになっている姿もとても可愛くて、嬉しくなったのでした 梅の花を見つけた後、「おかあさんと見つけたよ！」と朝登園してくる時にも見つけたことを嬉しそうに教えてくれるお友だちもいました。畑へ行った時にはいちごかチューリップの芽を見つけて大喜び 目で見える春を見つ

けたり、「(春は)この天気！！」なんて、この暖かさを思い切り体で感じていたり～お友だちとお家の人と、いろんなところで春をいっぱい感じて、春がもうすぐそこまで来ていることを一緒に喜べる、それはとても素敵だなぁと思いました。

2月1日に節分の集まりがあり、4人の鬼がやってきました。各学年から「オニはそと～！」とボールを投げられ・・・それぞれの「オニはそと～！」があったのですが、年長さんの迫力にはビックリでした。節分と言えば、巻き寿司 今年もみんなでいただきました。おしゃべりが大好きなお友だちですが、この日は、北北西を向いて、黙って食べる・・・でもやっぱりお話をたくて、小声でひそひそ話している姿には笑ってしまいそうになりました。2月も楽しいことがたくさんあったのですが、節分を楽しんだ次には、もちつき大会が行われました！きなこ・あんこ・大根おろし・ごまだれ・えびの5つの味でいただきました。つきたてのおもちはとっても柔らかくておいしい 食べ

出したら止まらない～！という感じでした。「よいしょ～！よいしょ～！」大きな声で応援したぽっぽ・さんぽ・らったさん！応援はもちろん、しっかり杵を持ってつく！カッコいい姿を見せてくれた年長さん！そんなみんなとそしてお父さんもお母さんも一緒に楽しいひとときを過ごせたこと、とても嬉しく思います。前日から最後の片付けまで、多くの方々のご協力によって無事に終わることができたことを心より感謝いたします。ありがとうございました。

先日、くすの木広場にあるみかんの収穫が行われました。花が咲き、実ができて緑から黄色になるまでみんなで見守ってきました。そのみかん、今年は全部で215個！でも前に落ちてしまったみかんもあるそうです、実際は300個近くあったそうです！園庭にあるあの木に300個も！しかも1本の木にそんなにたくさん実るとは思っていなかったの

で驚きました。収穫後、みんなでいただくことになったのですが、皮を剥こうと少し指を入れるだけで、ほのかに香っていたのが一気に広がりました。香りとジューシーで甘い共同産みかんに感激でした！そして、剥いた皮でママレードを作って下さり、ロールパンにはさんだり、クラッカーにのせていつもとは少し違う、ちょっぴりおしゃれなおやつをいただきました。

ふとした時に上を見上げて「だんだん大きくなってきたね～！」と何気なく話したこともありました。そんな会話を交わしたみんなとみかんを味わうことができ嬉しく思います。

あっという間に1月、2月が終わり、気がつけばもう3月。今のクラスで過ごすのもあとわずかとなりましたが、残された日々を元気いっぱい過ごしていきたいと思います。

(延原 光)

私が出会ったいろいろな人たち

毎週日曜日、午前9時に教会学校に集まってくる子どもたちは約60名います。4月や5月、春に新しく始まる学期には、100名を超す子どもたちが集まることもあります。また夏のキャンプにも約100名の子どもたちが集まり、3日間共に過

します。そんな恵まれた時間を過ごしてきました。

大阪にいた頃の教会では約5人の子どもが教会学校に通っていましたが、最初1人だったのが2人になり、少し新メンバーが増えて5人に！といった感じで、それでも5人の子ど

もたちに励まされることの多い教会生活でした。一般的に教会では「分級」という形で礼拝後の活動時間に学年を分けて、遊ぶことが多いのですが、5人では分けることも難しく、いつも一緒に遊んだり、時には学んだり、何かを作ったりしてその時間を過ごしていました。共同教会では附属幼稚園から小学生にあがった子どもたちが、そのまま教会学校に通い続けることが多く、小学生にあがりそれぞれに違う学校に通っていても、教会学校に集まってなつかしい友だちと一緒になつかしい場所で過ごす。そして幼稚園での生活とは少し違った遊びを試みたり、話を聞いたりしながらその時間を過ごすことができます。

そんなにあくさんの子どもたちと一緒に教会で過ごした経験がなかったこともあり、どんな対応をしたらいいのかわからないことも多くありました。また、バタバタと走り回ったり。準備に追われたりして、子どもたちと会話を交わせない時もあります。そんなとき、あとになってとても後悔したり、次にはゆっくり声をかけようと思ったりすることもあります。

スタッフの対応もそれぞれの性格によって異なり、おおらかにつつみこむように子どもたちと接する人や、子どもたちの目線でいつも話をする人や、おもしろくたのしい言葉をか

ける人など、それぞれ大人のキャラクターによって子どもとの接し方が異なります。そんな中でもそれぞれが子どもを愛しながら、何かメッセージを持っていつも子どもたちと過ごす時間を大切にしているおとなばかりで、礼拝の中でのお話や絵本を読む時間などからも、そのメッセージや子どもとの対話に驚くことや、涙が出そうになる時も多いです。スタッフの一人として、また副牧師として教会学校の子もたちと出会う時が与えられていることに感謝です。また同時に問われることも多く、教師会でのスタッフや教師の打ち合わせではいつも、そのことの重要さを気づかされる時となっています。

「おはよう！」とか、「田中あほちゃん！」とか、そんな会話のやりとりの中でも、子どもの目がきらきらと輝き、一人一人の存在の大きさを感じさせてもらっています。新沢としひこの歌と一緒に歌ったり、中島みゆきやソウルフラワーの歌を歌ったり、聖書を一緒に読んだり祈ったりしながら、一緒に過ごすその時間が何か繋がっていることを願いながら過ごしています。そして大きくなってたまに遊びにくる中学生や高校生の顔を見ていると、きっと幼稚園での生活や教会学校での生活が彼らのなかに生きていると感じ、また励まされるのです。 (田中知恵)

大切な贈り物・津門川 55

“ それぞれにとっての津門川 ”

『これって川だったんだ』これは僕が初めて津門川掃除に参加したときに感じた最初の感想でした。地域の人からしてみれば失礼な話かもしれませんが、しかし僕にとっての川は自然の中のひとつの部分。川原があって、夏には川に入り泳ぐことができる。そんなことが当然だと思っていました。コンクリートで固められ本来の姿をかえられたそれは、僕の中で川という認識ができなかったのです。

そんな気持ちを持ちながら掃除に参加したのですが、そこで僕にとって驚くべき発見がありました。『魚がいる。』しかもよくよく見ると鴨までいます。目で見える大きさの生き物があるなんて考えていなかった僕には、そのことがすごく新鮮なことに感じられました。そして同時に自分の認識は間違っていたのかもしれない、と思いました。『人が手を加えた自然が一概に悪いものなのだろうか』そんなことを思いながら地域の皆さんと一緒に掃除をさせてもらいました。その中で本当にさまざまなものが捨てられている事に気づきました。空き缶やビニール袋、鞆なんかも捨てられていたと思います。もちろん知らない誰かが捨てたものでしょう。

それにもかかわらず文句を言う人はほとんどいません。掃除に参加していた人たちの本気で川をきれいにしたいという気持ちがよく分かりました。そうしているうちに自然と僕も『この津門川をきれいにしたい』と思えるようになっていました。結局、掃除の終盤には僕が最初に感じた印象はどこかへいってしまい、僕の中での津門川は立派な川になっていました。

その日の川掃除で津門川は本当にきれいになりました。それと同時に僕の心も少しかれいになったような気がします。それは川掃除に参加していた皆さんのおかげであり、また津門川のおかげでしょう。これからもきれいな津門川でいてもらうためにも掃除にも参加していきたいです。また、日々の生活に疲れたときなどはまた津門川のお世話になろうかなと思っています。

(栗山インターン 大村匡保)



2007年3月 あんなこと こんなこと...

- 3月 日(木) 午前 6時 30分 ~、早天祈祷会
3月 日(火) 金城盛紀先生、ハムレット講演会
3月 1日 日} 特別礼拝 新免貢先生説教
午後 5時 ~ 「今こそ求められる豊かな教師理解
~ 教会再生の秘策を真剣に考える ~
3月 1日(金) } 卒園式
3月 1日(日) } 礼拝後幹事会
3月 2日(火) } 午前 10時 ~、ゆっくり聖書を読んでみませんか
にしきた商店街...
・ 月 日(4日) } 午後 12時 30分 ~、津門川掃除
・ 月 1日(17日) } ストリートミュージシャンコンテスト
会場:(1日) 西宮公会堂、(17日) アクタ円形デッキ
アートガレージ
・ 3月 2日 ~ 4日 年長組作品展
関西神学塾
・ 月 日(9日) 桑原重夫先生、勝村弘也先生
「“現代の宣教”のための聖書注解書刊行をめぐって」
・ 月 1日(土) 特別講義 講師: 新免貢先生
初期キリスト教のかき消された声を現代へ
~ 『異端文書』も捨てたものではない~
・ 月 1日(金) 勝村弘也先生「死海文書を読む」
・ 月 2日(金) 田川建三先生「マルコ福音書註解(中)」

教会学校から



《2月の活動報告》

- 2月 日(4日) もちクイズ大会
2月 1日(日) 豆であそぼう! 納豆ネバ消し大会!
2月 1日(日) ちょっといいこと・お父さんと一緒にしりとりパネル!
2月 2日(日) 切り紙であそぼう!

《3月の活動予定》

- 3月 4日(日) まと当てドッチビー
3月 1日(日) 切り紙パート2
3月 1日(日) 新入生歓迎パーティー・うたうたうたって歓迎会
3月 2日(日) 歓迎ガーデンパーティー・
園庭で美味しい食事を囲んでパーティー

今月のあ・そ・び “けん玉”で遊ぶ

子どもたちの遊び道具は、完成度の高いものかどうかで、その遊びの広がりやうんと違ってきます。幼稚園や教会学校で使っている“けん玉”は、日本けん玉協会認定の競技用けん玉です。“認定”も“競技用”も、大きさでないのは、全体のバランスがよく、長時間遊んでも違和感がなく遊びやすいけん玉なのです。たとえば、玉の大きさや重さ、穴の口径など、“術”をみがいて上達して行くとき、それにあわせて使いやすくできています。玉を振って半回転させてけん先で受けとめる“ふりけん”の場合、認定の競技用けん玉は、玉の重さ、穴の口径、けん先の太さなどが程よくできていて遊びやすいのです。他の市販のけん玉のほとんどは、術をみがいて行くことへの対応が考慮されていません。

そんな競技用けん玉というものがあることを教えてもらったのは、20年程前のことでその当時尼崎市の児童館などの仕事をしていた川端清五郎さんです(ついでに“・・・協会”なるものにも、けん玉の販売をめぐって“利権”があるらしいことも教えてもらいました)。川端さんにはけん玉の遊びも教えてもらって、それが今も続いています。

けん玉の玉を、大皿と中皿との間を往復させる遊びを“もしかめ”と呼んでいます。その時に歌うのが童

謡の“うさぎとかめ”です。これをほぼマスターすると次の段階の少し早いテンポで遊ぶ時の歌が、“ジンギスカン”です。これらのことは、川端さんからの“伝承”がそのまま今日まで続いています。

川端さんのけん玉の“伝承”で守っていない、というか聞かないことにしていたのは“けん玉は集中力を育てる”というけん玉遊びの学習効果説です。けん玉は集中しないとできない遊びであるのは確かです。しかし、けん玉に集中して遊ぶことが、他の学習に集中する力にはたぶんならないはず。けん玉の大皿に玉を乗せるのがやっとだった子どもたちが、“もしかめ”を4番までやりぬいて、更に“ジンギスカン”をやりぬいてしまうのは、その遊びに“夢中”になっているから。それも夢中になる時間が保障されているから。けん玉の玉が大皿・中皿を行ったり来たりするだけの、いわば他愛もない遊びに時間を費やすより、他に“有効”なことはいっぱいあります。という“有効性”のことを言い出したら、けん玉で遊ぶということは子どもたちの世界に登場しにくくなります。

そうして夢中になってしまう遊びには、教育効果ではなく、教育の力は備わっています。もっとも本質的な意味での教育がけん玉のような遊びで起こっているのです。

最初けん玉を手にした子どもたちが、大皿に玉を乗せるまでには、無限の距離があるように見えてしまいます。この場合の無限の距離は、ながめている側はもちろん、当の子どもたちこそがその“無限の距離”に挑戦しているのです。無限の一步などという踏み出しにくい一歩も、誰かがやっているのを見て、自分でもやってみたくてだったら、踏み出してしまえるのが“遊び”です。そこで繰り広げられているのは、“未知の世界に踏み出す”誰の力も届かない自分だ

けで生きる世界”などの、人が生きて必ず通らなければならない世界でのことで、それが遊びで起こっています。集中力どころではないのです。というようなことなのでしょうが、遊びの道具はだからこそ完成度の高いものが求められます。遊びの広がりや持続ということでだったら、“もしかめ”や“ジンギスカン”を教えてもらって、幼稚園や教会学校のけん玉の遊びは、今も不動の人気で続いています。

(菅澤邦明)

まいの勝手に何でも案内

こんにちは。実家に帰ってくると十中八九体調が悪くなる舞です。実家が悪いということではなくて、精神的なもののせいだと思うんですけどね。やっぱり安心するというか。生まれてからある程度大人になるまで過ごしてきた場所とか、一緒にいた人とかってというのは、どうしたって人間形成に大きな力を与えてるし、嫌であっても離れられないし、変えられないものをもらっているし、いわゆる「HOME」ていう言葉で表される概念なんでしょうね。なんちゃって外来語は使いたくないワタクシですがそんな風に思いました。そして、その感覚を広げれば、母国と他国の話にもつながり、話の中であれど、ある皇国の皇帝の息子として生を受けちゃった人間には重い意味を持つんじゃないかと思うのです。というわけで今回は前回に引き続いて「守り人シリーズ」の紹介、というか感想をお送りしたいと思います。あ、前回の訂正を一つ。シュガは「星読博士見習い」ではなく「聖導師見習い」でした。とんだ初歩的ミスをしてしまってお恥ずかしい。では、以下とってもネタバレしちゃいますんで、読みたくない人は読まないでくださいな

いやー、先日発売されました『天と地の守り人』第三部でついに完結してしまいましたよ！守り人シリーズ。

清しいやら寂しいやら。しかし全く期待を裏切らない結末でした。命が無駄になってないところが何より素敵。最近の小説は何かと登場人物が死んで、お涙頂戴になるんですが（ケータイ小説なんてその極み。ホンマ嫌いですが）守り人シリーズにおいては主要人物誰も死ななかつた！（私的にお亡くなりになった方々は主要ではない）やってくれました上橋さん。皆が「生」に対してまっすぐに向き合っていて、ある意味「死」より辛い「生」を選ぶっていう、本当に素敵な話です。実は、私二年半ほど前に、学校に講演にいらした上橋さんと少しだけお話したことがあるんです（自慢）。そのときに『夢の守り人』に関して、「生」とか「命」とかについての考え方が素晴らしいな、と思ひまして。『天と地の守り人』でもその考え方が貫かれていて、嬉しい限りです。

ちなみに当時はまだ初め三作しか出ていない状態でして、私は「狩人のジンさんをもっと出してください！！！！」とリクエストしてたんですが、ここまで重要キャラに育つとは正直予想していなかったの、（別にリクエストのためではないですが）勝手に喜んでます。アムスラン殿

！でも本命はすっかりヒュウゴに乗り換えてるんですけどね。だってヒュウゴさんは『天と地の守り人』の

影の主演ですから。全てが彼の計画通りですから。文字通り彼が命を賭けてこの結末に持っていったんですから。ラウル王子にタメ語で話すなんて最強ですよ。彼はきっと太陽宰相の跡をつぐはず。『蒼路の旅人』の登場シーンからしてホント素敵。でも彼と付き合ったらソドクさんが絶対うるさいですよ。「もれなくソドクが付いてきます」みたいな。きっと同棲とかしてもほぼ毎日ソドクさんが様子見に来るんですよー。もう。あの人はヒュウゴの何なんですか。「17歳で出会ったから未だに子ども扱いする」ってヒュウゴは言ってますけど、あの世界の17歳で結構いい大人ですよ？絶対年齢のせいとかじゃないし！兄のラスグよりヒュウゴを優先して！むきー！と、勝手に妄想して嫉妬する毎日です。上橋さんはあとがきで「もしかしたらバルサの若い頃の話を書くかも」っておっしゃってますけど、バルサよりヒュウゴの過去を書いてください。もう是非。あれだけ思わせぶりの描写があったのに最終巻でノータッチって、ヒュウゴファン的には生殺しです……。

あ、勿論普通に主役たちもそれぞれに成長してます。チャグムやシュガは当然のこととして、バルサやトロガイなんかは今更何を成長するのって感じですが、それでもしてるんですよ。これで完結っていうのは仕

方ないのかも。あと、すごいと思うのは、どの人物を取ってみても、どの人物の気持ちになってみても納得できました。敵とか悪役って概念が余りないですよ。世界全てを描いているからなんでしょうけど、この国にとって、この人は「悪」かもしれないけれど、その人にはきちんと理由があって……というのが、無理なく書いてある。あー世界ってこういう仕組みなんだなあ、別に特別悪人がいなくても、少し思いが強かったり弱かったり、少し考えが足りなかったり強すぎたりするだけで、戦争は起こるし悲しいことも沢山あるんだなあ、って純粹に思いました。

チャグムは新ヨゴ皇国の皇子として生まれ育ち、一時はその身分が嫌になり、ある意味その嫌悪は彼に一生付きまとうとは思いますが、それでも今作で、「皇子」として生まれた身は、国の頭として国民のことを何よりも考え、父である皇帝に疎まれても、歯向かってでも、国を良い方向へ導いていきます。若干17歳とは到底思えない彼ですが、『虚空の旅人』でタルサンに言ったとおり、薄布を通して国民を見るのを好まず、素顔のままに皇帝となります。彼のこれからの苦労を思うと胸も痛みますが、彼ほど他国の王族と強いつながりを持った皇帝もいないでしょうし、新ヨゴ皇国の未来は明るいと思います。世界史を専門にしている人間と

しては、どうしても国の歴史で考えてしまうので、跡継ぎにも恵まれることを祈りますが……。跡継ぎと言えばロタ王国はどうなってしまうのでしょうか。私の中で思いついたものに「シハナ薬子説」というものがありまして、これはシハナが、荻原規子著『薄紅天女』の登場人物、藤原仲成こと薬子のようになる、というものです。母に話したら怖すぎると言われましたが。

何だか感想というより大半が妄想でしたが、土台がしっかりしてないところやって妄想で楽しめませんからねー。やはり偉大です「守り人シリーズ」。そして上橋さん。まだまだ妄想は尽きませんが字数の都合でこの辺で。また次回。 (高橋 舞)

本のイラストを無視して勝手に描いてみるのコーナー vol.2



“編集後記”から続く

「要するに老人とは何かというと、人間じゃない『超人間』だと理解するんです。動物と比べると人間は反省する。動物は反射的に動く。人間はそうではない。確かに感覚器官や運動器官は鈍くなります。でも、その鈍くなったことを別な意味で言うと、何かしようと思ったということと、実際にすることとの分離が大きくなってきているという特性なんですよ。だから、老人というのは『超人間』と言ったほうがいいのです。」

(「老いの超え方」吉本隆明、朝日新聞)

父が老人保健施設に移ってから2週間近く経ってから、“孫”を借りてその施設を訪ねました。サンダーバードに3時間乗り、高岡駅で従兄弟夫婦が運んで来てくれた車を借りて、氷見市余川のその施設に着いたのは12時30分をまわっていました。2階の父の部屋に行ってみると、昼食の終わった父はフトンをかむって眠っていました。ほぼ同時に着いた義兄と父を起こし、父の車椅子を押してデイサービスの人たちの集まる1階まで下りました。眠っていたのを起こした父の表情が、ずいぶんおとろえたように見えて驚きました。とってしまったのは、父が入れ歯を外してしまっていたからだと後で気が付きました。義兄によれば、ケアハウスから老健に移るに際して、入れ歯が行方不明になって、そのままになっているのだとの事、老健では、流動食が主で、入れ歯はなくても間

に合っているとのことでした。老健施設のデイサービスの人たちが集まる1階には、その日たまたま“おじさん・父の弟”が来ていました。口も耳もたっしやとはいえ、88歳のおじも週2回同じ老健施設のデイサービスの世話になっています。92歳と88歳の兄弟、義兄、92歳の父の3歳の曾孫、じいさんとばあさんが施設で顔を合わせていることに、少なからず不思議で、少なからずうれしい気持ちになりました。その時は、父を相手に義兄も合わせて3局囲碁をしました。デイサービスで来ていた80歳前後のおじいちゃんがぐるっとまわってくる毎に、“・・・こんな年で碁を打てるのは、この人は段を持っているに違いない”とつぶやきながら繰り返し立ち停まるのでした。そのことはともかく、老健に移ってからは、1月にはずいぶんおとろえたと見えたその時よりは元気そうな

のです。

その意味ではそこが“自分であることを失わせる、生きる意味をそいでいく場所”と書いてしまったのは、言い過ぎのように思っています。思っていますが、流動食だから、入れ歯は行方不明でよかったり、日中も寝巻きのままでいいと思えません。“入れ歯”そして歯というものは、咀嚼する時、更にその人の表情などとも深くかかわっているはずですから、流動食になったから不要になるとは思えません。昼食が終わると横になってふとんに潜り込んでしまうから、そしてそこが施設だから、一日中を寝巻きのままで過ごしていいとも思えません。確かに、その時の父の様子は、入れ歯を求める、寝巻きを替えてもらうなどのことは求めませんでした。しかし、向かい合えば覚束ないなりに困暮をする父です。たとえば入れ歯をはめるなり、寝巻きを着替えるなどをするのは、「世話や扶養を自ら担う人、担わざるを得ない人たちに『ただ乗り』してしまう可能性」があるとして、それを“義務”としないなら老健のような施設では、実現の可能性は全くなくなってしまいます。そして、入れ歯をはめるなり、寝巻きを替えてもらうなりのことは、「人の生存、生活のいちいちが、

その周囲の一人一人の自発性によって、ことばを替えれば恣意性によって保持されるしかない」(「所有と国家のゆくえ」稲葉振一郎、立岩真也、NHKブックス)となれば、老健で生活する父は、たとえば入れ歯なしで、終日寝巻きのままで過ごすことになります。というのは、たぶん、父の生活している老健施設では、入れ歯のことも寝巻きのことも、父の場合に応じて対応するというマニュアルは存在しないはずですから。だからと言って、そこで働いている人たちが手を抜いている訳でも、“自分であることを失わせる、生きる意欲をそいでいく”という訳でもありません。たぶん、入れ歯のことを心配したり、寝巻きのことを心配したりするのは、父の世話をその施設にお願いしている家族の役割で、そこに家族が介在して、その人の家族にしかできない役割を果たすことで始めて、その人(たとえば父)は、自分であること、生きる意欲を持ち続けるのだと言えるように思えます。ですから“たとえば老健施設などがすべてのことをしてくれる”と言ってしまうのは、父のような人が自分ではなく、周囲の人たちの“恣意性”によって、生存・生活が左右されてしまうことになりかねないのです。(菅澤邦明)

つとがわ 編集後記

共同通信126号(2007年2月)の編集後記で、老人保健施設で生活することになった父のことで「・・・自分であることを失わせる、生きる意欲をそいで行く場所かも知れません」と書いたことに、そんな施設で働いた経験を持っている人から反論されることになりました。そこで働いている人たちは、「・・・自分であることを保たせる為、生きる意欲を持たせる為」にこそ働いているという意味で。

父が世話になっている施設には、変わるようになってから2週間後に、「孫」を借りて訪ねることになりました。じいさんとばあさんと孫の往復6時間の電車の旅の訪問記は、それはそれでまたとない体験になりました。そして、2週間後訪れた父の様子、移ってからほぼ1ヶ月経った父の様子などから、言い過ぎの部分はあったにせよ、そんなに間違っただけではなかったとも思っています(以下、少し長くなりそうなどで、別に書かせてもらうことにします)。(K)

友達がゴーヤを送ってくれました。この時期、なかなかお目にかかれないゴーヤ、友達の近くのスーパーには売っているというのです。しかも沖縄産!海を越えてやってきたゴーヤは少し苦く、夏の香りがしました。久々の味はもちろん、送ってくれた気持ちがとても嬉しかったです。(I)

この間の日曜日、ケロポンズと新沢さんのコンサートへ行ってきました。3人を見てみると、何だかお笑いを見ているようで、最初から最後まで笑っぱなしでした。大好きな「にじ」のうたも歌ってくれて、生歌に感激してしまいました。隣りに座っていたTさんいわく、ケロちゃん演じる「荒野のカーボーイ」は、Tさんのだんなさんも大好きで、ビデオも購入し家で見ていたりとか。家族でコンサートに参加されている人も多く、私もそんな風にできたらステキだな~と思いました。(Y)

先日、短大の時の友だちがまたピアノを習い始めたと聞き、驚きました。そんな時、ピアノに関する番組を見ました。色々な音色が出せるピアノはやっぱりステキだなあと思いながら聴きました。その直後、昔の楽譜を開いてピアノを弾いている私がありました。思うように指がまわらないけれど・・・やっぱり好きなピアノ。また時間をみつけて習いに行きたいなあ~なんて思っています。

(N)

目で、耳で、鼻で、肌で...だんだん春を感じられる季節になりました。先日、子どもたちとの散歩中につくしを見つけました。つくしが生えている姿なんてあまり見た記憶がなく、ましてや食べたことなんて1度もありませんでした。そのつくしを摘んで帰り、佃煮にしてみました。初めて舌で感じた春の味に大感激!!でした。

(Y2)

双方の父が施設で生活している。2月には親善大使に3歳の孫を連れて訪れてきた。幼い子どもがそこにいるだけで、場が明るくなりすっかり大使の役目を果たしてくれていた。氷見へは3時間の北陸線サンダーバードとあと30分あまりの車、相当乗車時間がかかる。ここが、ばあばの腕の見せ所。今大好きなわらべうたは、やなぎのしたには~。最後の「いたずらぼうず」のところを、いたずらあかり~と歌い替えて何度も何度も楽しむ。手をとっても上手に動かすこともできている。と、感に堪えないとばかりに大きな声で「おばあちゃん、でんしゃのなかでうたうとたのしいねえ」。そうよ、たとえ3時間でもおとなの相手次第なのです。(J)

